

感じたことから①

○「百聞は一見にしかず」の続きとは…

「百聞は一見にしかず」とは、ご存じのとおり「実際に自分の足で現地に出向き、自分の目で見て確かめることが大切である」という意味になるかと思います。比較的に学校での学習は机上で聞くことが多くなりがちですが、実際に目で見てみるにより学びが深まっている様子も見られています。

ただ、この言葉には続きがあるのです。「百聞は一見にしかず」に続いて、

「百見は一考にしかず」 「百考は一行にしかず」

と続きます（本当はさらに続く言葉があるのですが、ここでは省略します。）

「聞くことよりも見ること」「見ることよりも考えること」「考えることよりも実行すること」が大切だということを示しています。

そして、これをひとつながりの言葉として捉えると、「よく聞いて、事実を見て、自分の頭で考えて、行動（体験）してみることで学びが深まる」ということを教えてくれているように思います。

先日、4年生の子どもたちが社会科の学習において、小郡市埋蔵文化財センターの皆様のご協力のもと、「昔の用水路づくりの体験」をしました。重い石などを運ぶ体験、協力して地面に用水路を作っていく体験などをしました。先生の話の聞き、昔の作業に関する写真等を見ることで、知識が身に付きます。ただ、それに加え、実際に体験してみたことで、昔の方々の苦労が実感を伴いながら理解でき、さらにその凄さを感じたことでしょう。本校では、こうした体験を通した学びも大切にしていきたいと思っています。



感じたことから②

○理想のモデルに自分を近づける

小学校の時から剣道を習っていました。福岡市にある道場にバスで通い、厳しい練習は「きつくて嫌だな」と思いながらも続けていました。それでも続けられた理由の一つに、同じ道場に来ていたとても強い先輩に憧れていたということもあげられます。その先輩は強いばかりでなく、その立ち振る舞いがとてもカッコよく私には映っていたのです。道場に入るときに礼をする姿一つをとっても、目線、声の響き、礼の角度、間の取り方に美しさを感じていたのです。その凛とした姿に「ああなれたらいいなあ」という理想を描いていたのかもしれません。

さて、今の自分（現実の自己）を将来の自分（理想の自己）に高めていきたいという“向上心”をもたせる上で大事なこととして、いいモデルとの出会いがあるように思います。学校の図書室には、たくさんの偉人の伝記を置いています。子ども達にとって、偉人の姿は、将来の自分を高める“向上心”につながることでしょう。また、先日、ノーベル化学賞の受賞が決まった碓合憲三（そあいけんぞう）さんの研究に向かう姿も素晴らしいモデルの一つになるように思います。

ただ、子どもたちが“向上心”を高めるためのモデルは、書物の中や遠い存在ばかりでなく、もっと身近にも存在します。それは、校内での上級生の姿であり、そのモデルを示すいい機会が「運動会」ではないかと思います。紅白に別れて競い合う「運動会」をリードするのは、6年生であり、応援団のみんなです。そして、その姿が後輩にとって「自分も6年生になったら、あんなになりたいなあ」といった憧れの対象となれば、下級生の“向上心”はいっそう高まることでしょう。「運動会」当日ばかりでなく、「運動会」に向けて様々な取り組みを行う中で、“仲間を気遣う声かけ”や“様々な場面での機敏な動き”等が下級生の心を惹きつけることでしょう。「運動会」が、上級生のモデルとなる姿を育み、その姿への下級生の憧れを生み、毎年、次々につながっていく機会になることを願っています。

